Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-07

山瀬善一先生の学問(山瀬善一博士記念号)

高橋, 秀行
中村, 美幸

(Citation)
国民経済雑誌,152(5):135-159

(Issue Date)
1985-11

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/00173514

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/00173514

山瀬善一先生の学問

高　橋　秀　行
中　村　美　幸

I

山瀬善一先生は，昭和60年3月末日を以て神戸大学を定年退官され，同年4月，神戸大学名誉教授の称号を授与された。昭和22年10月に本学経済学部の前身である神戸経済大学の助手に採用され，研究者の道を歩み始められてから実に37年と6か月の年月を閲する。この年月は，山瀬先生御自身の個人史においてはいうまでもなく人生の最も活力に溢れ，充実した時期に当たるが，巨視的にこれを見れば，第2次世界大戦後今日に至る日本の歴史，いわば広義の「戦後史」が，多彩なドラマを展開しつつ，ほぼワンサイクルを完了した期間にも当たる。焼跡と飢餓の時代に始まって，アメリカ軍占領下に急速に進行する戦後改革と復興の時代，その後を承けて高度成長期の展開，そして2次にわたる石油危機を引金とする世界同時不況の出現と低成長経済への移行——もし歴史の時間に自意識があるとすれば，ひたすらに走り抜けて来た40年の歳月をふりかえって一つの時代の終りを自覚することであろう。

私たちの学問研究の営みは，意識するとしないにかかわらず，また好むと好まざるにかかわらず，その本質的な部分において必ず時代の刻印を受けるものである。山瀬先生の学問もまた戦中・戦後史との深いかかわりを抜きにしては語り得ない。大きな節目だけを拾い上げても，学徒動員による軍務参加と戦争体験，戦中から戦後にかけての価値の大転換期に始まった第2の青春，大学紛争体験，70年代に噴出するグローバルな危機現象（資源，エネルギー，環境）との出会い，などを挙げることができる。これらの事件や状況は，先生の思考

と感性に少なからざる影響を与え，それを媒介としてさらに先生のお仕事自体の方向と内容に一定の影響を及ぼしてきたといえる。これらの個々の局面については，以下の記述の中でそのつど触れて行くつもりである。

II

私たちは，以下数節にわたって，山瀬先生の学問の特徴を，時間の流れの中で，できるだけ包括的に跡づけたいと考えるが，38年に及ぶ先生の学問の営みはまことに広範多岐にわたり，限られた紙幅の中でその全貌を漏れなく詳細に伝えることは，私たちの能力をはるかに超える。そこで取扱う問題を次のように限定したい。山瀬先生の学問という場合，ここではその意味を広義にとって，(1)固有の研究活動，(2)教育活動，(3)研究・教育組織体の運営にかかわる内外行政活動，の3本の柱から構成される活動領域と理解する。

まず，(1)固有の研究活動について，私たちは，記述上の一便法として，先生のこれまでの研究活動の歩みを，発表された研究の内容に即して，暫定的に4つの時期に分け，クロノロジカルに各期の特徴を画き出したい。この時期区分は，いうまでもなく，一つの便宜的な物差しに過ぎないものであって，この区分によって先生の研究関心や問題意識までが截然と分けられるという底のものではない。各期を貫いて共通する方法的特徴があり，また後に触れるように，時期によって深い浅いの差はあれ，先生の研究活動全期にわたって温存され，深められてきたテーマ群があることを見落してはならない。

さて先生の学問の歩みを時期区分を設けて跡づけるに当たって，まず最初にことわっておかねばならないことが一つある。私たちは，先生の学問を一つの完了形としては取扱っていない。先生は，神戸大学こそ定年退官されたものの，断じて学問から「引退」されたわけではない。退官と同時に先生は，本年4月より広島経済大学に経営史担当の正教授として迎えられ，この新しい仕事の場で引き続き教育・研究活動に従事されている。先生は今なおまぎれもなく現役の人である。山瀬先生の学問を語るこの稿も，したがって，現役研究者山瀬教

授の研究活動の途中経過報告であるに過ぎない。

(2)と(3)の活動業績については，後段の節でそれぞれ独立した項目として取扱う。

III

先生の研究活動第1期は，昭和22年から昭和29年頃までのおおよそ8年間であるが，これに先立つ数年間の学生時代は第1期のいわば準備段階である。神戸商業大学入学後間もない昭和18年12月，先生は学徒動員によって学窓を離れ，軍務につかれた。私たちは，この当時のニュース映画の一こまから，秋雨煙る神宮外苑競技場を銃剣を執って分列行進する学徒数万人のあの有名なシーンを知ることができる。山瀬先生を大学から引離したのは，まさにこの年の全国的な学徒動員令である。約2年の軍務を経て終戦となるが，少年期から青年盛りを戦争下に過されたことは，後の研究に大きな影響を与えることとなる。戦後，先生は母校に復学され，宮下孝吉先生のゼミナールに参加し，歴史研究の一歩を踏み出された。恩師宮下先生との深い師弟関係はこの時に始まり，昭和46年宮下先生御逝去の時まで続くことになる。

宮下ゼミナールで山瀬先生が取り組まれたテーマは，プロテスタンティズムの倫理と近代資本主義の精神との歴史的関連ならびにマックス・ウェーバーの社会科学方法論であった。先生は，恩師の勧誘もあって，卒業後も引き続き学業に邁進する道を選ばれ，昭和22年10月，神戸経済大学の助手に採用されることになった。この初期の研究成果は，昭和25年から29年まで，「国民経済雑誌」に掲載された5本の論文であり，いずれもドイツ社会経済史をテーマとするモノグラフィーである。このように，先生の研究活動の出発点は，ドイツにかかわる歴史研究で，その特徴は日常生活への即物的関心であった。しかし，昭和29年頃を境に，先生の研究関心に大きな転機が訪れる。すなわち，ドイツ社会経済史からフランス社会経済史への研究重心の移動である。この方向転換を促した一つの大きな理由は，ドイツ史学における制度史偏重傾向に対する先

生の不満と疑問である。昭和25年のデビュー論文「獨逸中世後期に於ける商品流通の一考察」「(国民経済雑誌」, 81の2）の中ですでに，この不満の一端が，ドイツ中世末期を静態的に，つまり法制史の固定した概念をもってとらえたベローに対する批判という形で，潜在的にあらわれている。この時期の方向転換については，先生御自身があるエッセーの中で次のように語られている。「制度史的研究では≪動いている現実≫が捉えられないという不満があったし，いかに実証的にやったとしても，≪こうあった≫とか≪こういう傾向があった≫とかは知りえても≪なぜそうなったのか≫ということになるとなにも答えてくれない。理論を重視する人は≪なぜそうなったのか≫を特定の理論によって説明する。しかしこれでは事実が完全に理論の例示になり下がることになり，はたして独立の科学として歴史学が成り立つのであろうかと強い疑問を抱いた。こうした不満を解消してくれる光明をわたしが見い出したのは，現在言われるフランスのアナール学派であり，これがフランスの研究に入り始めるわたしの切掛にもなった。」（山瀬善一「序に代えて――回想――」山瀬善一先生還暦記念論文集「ヨーロッパの展開における生活と経済」, 神戸大学西洋経済史研究室編，晃洋書房，昭和59年，6ページ，以下「回想」と略記する。）

以上のように，先生は淡々と述べられているが，いうまでもなく今日のように学問研究が高度に専門化している状況のもとで，ドイツ史研究からフランス史研究への方向転換は，決して生易しいことではない。にもかかわらず，先生はこの移行を見事になしとげ，研究発表になんの切目を作ることなく，昭和30年にはすでに最初のフランス経済史論文「フランス中世の葡萄についての序説」(「国民経済雑誌」, 91の6）を発表された。こうして先生の研究活動の第2期が始まる。

IV

第2期は，フランス史研究への方向転換をとげられた昭和20年代末から昭和40年代初に至る期間である。現時点からふりかえって見れば，この十数年間は

先生におけるフランス社会経済史研究の本格化第1期ということもできる。第2期の先生の研究業績は，20余の研究論文と，その一部をまとめられた一冊の著書から成る。

まずこの第2期において先生が主たる研究対象として選ばれた歴史空間＝地域について見ると，二，三の例外を別とすれば，二つの対照的な地域群が明瞭に浮び上ってくる。一つは低地地方，とりわけフランドルであり，もう一つは南西フランス，とりわけ Midi と呼ばれる南フランス（ラングドック，プロヴァンス）である。この地域選択については，先生御自身の興味深い発言をここに二つ引用して説明に代えたい。「……かつてマルク・ブロックは南フランスの中世社会・経済史の研究不足を嘆き，ルシアン・フェブルは中世都市研究についてのアンリ・ピレンヌの偉大な業績に関し，今後とるべき手段としては低地地方と南フランス都市およびイタリア都市との間に注意深い綿密な比較をなすことであろうと強調した。二大巨匠のこの言葉に刺激されて南フランスについてのわたしの研究遍歴が始められたのである。トルバドゥールを生み出し，異端カタリ派を蔓延させた南フランスの歴史的個性はいつしかわたしをその囚にしていた。」（山瀬善一著「南フランスの中世社会・経済史研究」神戸経済学双書6，有斐閣，昭和43年，はしがき）「学生時代から神戸で過してきたせいもあって，わたしは新しい文化の生誕は，同質文化の中より，異質文化が相接するところに容易に見られるのではないかと密かに考えていた。そこで，わたしの研究対象地域は結局，南フランスとフランドルへと落着いていった。南フランスはローマ文化とキリスト教文化の混合のみならず，イスラム文化のヨーロッパへの窓口のひとつでもあった。……フランドルはヨーロッパ北部における諸地方への十字路にあたっている。それとともに，近くを流れるミューズ河流域地帯は，ヨーロッパ北部地域にあたってローマ文化を古代から中世に亘って一貫して温存してきた数少ない場所のひとつでもあった。」（前掲「回想」8ページ）

さてここで，一つの重要な問題点に触れておかねばならない。先生が，ヨーロッパの南北に，二つの異質文化交錯地帯を選択されたのは，この両地域を流

行のテーゼに沿って安直に比較するためではない。近代資本主義発達史における北部の優越性を盾にして，「典型的」な先進北部と「非典型的」な後進南部という類型をつくり上げ，前者を映し出す鏡としてのみ後者を問題にするといった類の浅薄な比較史論を先生は峻拒する。南フランスは，そしてまたフランドルは，その固有の歴史的個性と独自の価値において研究されなければならない。そのような理解の深まりの果てに，はじめて有意義な比較が可能となるのである。その場合，先生はこの両地域をランデスクンデの手法による地方総合史として取り扱い，このような方法に基づいた比較，すなわち全体的な構造比較を目指されているのである。

次にこの期の研究業績をテーマ別に見れば，おおよそ以下の3群に分けられる。

〔1〕 中世商品史研究。先生はかねてから，従来の商品史研究が多くの場合原材料論ないし生産過程論に狭く局限されているか，あるいは平板な販売市場論に終っていることに強い不満を抱かれていた。先生が重要視されるのは，特定の商品が特定の歴史的環境の中で現実にもつ具体的な機能，特にその時代の消費生活の中に占める意義である。この観点から，先生の商品論では，奢侈品—必需品の歴史的二分法が大きな特徴となっており，この期の論文の中にもすでにその傾向は明瞭にあらわれている。取り上げられた商品は，中世ヨーロッパ商業史上代表的なステイプル商品であったぶどうとぶどう酒，毛織物，明礬である。

〔2〕 中世都市史研究。中世都市の成立とそこにおける市民的世界の形成は，ヨーロッパ文明を非ヨーロッパ文明からわかつ一つの重要なメルクマールである。ヨーロッパ中世都市の歴史的研究は，恩師宮下孝吉先生の畢生のテーマであったことから，その影響下に，山瀬先生においても中世都市史研究は，研究活動の全期を通じて，常に主要な関心領域となっている。もっともその取扱い方には差がある。宮下先生が制度史的であったのに対し，山瀬先生は多分に機能的把握を目指されている。このテーマに関する先生の研究は，社会史に重点

を置いたモノグラフィー（都市自治制，特に consulat の成立史研究，都市権力構造の分析）と経済史に重点を置いたモノグラフィー（市民の財産構造，特に土地所有と土地経営方式）とに二分することができる。

〔3〕 中世農業史研究。都市史研究ほど多くはないが，この時期に先生は，三つの論文の中で，南西フランスにおける開墾事業と村落建設，プロヴァンス地方の農村土地所有形態，農業経営方式，黒死病流行による農業危機等を取り上げ，北西ヨーロッパとは異質な南ヨーロッパ農村および農業の特性を検出されている。

このように研究の蓄積が着実に進行するなかで，昭和37年3月，先生は教授に昇任された。同じ年の10月，先生は文部省の長期在外研究員として，1年2か月フランスに留学する機会を得られ，先生には研究対象としてなじみ深いラングドックのトゥルーズ大学文学・人文学部を留学先に選ばれた。当時この大学では J. カルメットの後継者で，マルク・ブロックの学風を継ぐ中世経済史のフィリップ・ヴォルフ教授，近世経済史のフレデリック・モロ教授というフランス経済史学会の錚錚たる権威が教鞭をとり，南西フランス史研究の一大中心地となっていた。山瀬先生は，この両教授の懇切な指導のもとで，南フランス社会経済史の研究を一層深めるとともに，両教授の研究態度や教育方法からも多くの貴重な示唆を受けられた。この留学時に得た研究・教育上の刺激は，この後に続く先生の第3・4期のお仕事の上にさまざまな形をとってあらわれてくる。なお，留学の直前，先生は，それまでの研究成果の中から南フランス社会・経済史関係の論文をまとめられて学位論文「南フランスにおける中世都市の社会と経済についての若干考察」として提出され，39年2月神戸大学より経済学博士号を授与された。この学位論文を母体とし，留学後の研究成果を追加して昭和43年に刊行されたのが「南フランスの中世社会・経済史研究」（神戸経済学双書6，有斐閣）である。公刊以来17年を経た今日においても，わが国でこの主題に関して本書を凌駕する作品はまだない。

V

フランス留学から帰られて数年の間，一方ではこれまでの研究の整理と補完，他方では新たな研究に向けての準備という二つのお仕事が同時平行的に進む。帰国直後，先生は二つの新しい状況に直面される。一つは，いうまでもなく，フランス留学が生み出した新しい研究刺激である。外国での留学体験は，その内容が充実したものであればあるほど，留学者の精神に一種の深刻な化学変化のようなものを惹き起す。先生は常々広い研究視野を教授資格の条件と見なされており，留学体験をよき刺激剤として研究視野の拡大と方法の深化に大いに努められた。もう一つは，留学直前の37年3月に教授に昇任されたことによって，帰国後ゼミナールを開き，学生の研究指導を担当する義務が生じたことである。教育者としての先生の活動ぶりについては，節を改めて取り扱うことにして，ここでは先生の研究上の新展開について触れるにとどめる。

昭和42／43年から50年代前半にかけて，先生の研究活動第3期が展開する。この期の特徴は，対象地域の拡大と新しい問題領域への関心移動である。第2期の研究が比較的限定された地域――ラングドック，プロヴァンス，フランドル――などにおけるランデスクンデ的，すなわち地方総合史的研究の性格を帯びていたのに対し，第3期には先生の視野は，南部ヨーロッパについてはイスパニア，イタリア，北部ヨーロッパについてはフランドルを中心にオランダ，ポーランドにまで拡大する。これは南フランスおよびフランドル社会・経済史研究から南部ヨーロッパおよび北部ヨーロッパ社会・経済史研究への拡張的発展と理解さるべきであろう。そしてこのように拡大した地域空間を舞台として，今や新しいテーマ群が前面に登場する。戦争の社会・経済的影響である。このテーマ選択については，青春期に得られた先生の個人体験が直接・間接微妙な影響を及ぼしている。

教育期をもっぱら戦争下に過され，自らも銃を執って戦場に赴かれた先生にとって，平和の訪れは，日常化した「戦争＝死」からわが身を離し，これを反

省的に観察する機会を与えた。この反省はさらに戦争現象の全体を社会科学的に考察したいという志向へ発展する。その場合，先生の問題意識の核にあったのは，戦争の社会・経済的影響である。この方向での最初の作品は，すでに第2期の中頃に登場する。昭和36年，先生は神殿騎士修道会についての一作を発表されている。（「中世の国際金融とテンプル騎士団」経済学研究年報，8号，昭和36年5月）これは十字軍の社会・経済的影響を本格的に取扱ったわが国で最初の試みである。フランス留学中に訪れた大学のカリキュラムに必ずといってよいほど十字軍の特殊講義が含まれているのに深く感銘され，この時から先生の十字軍への関心は大きくはばたき始めた。十字軍については，これまで宗教史，戦争史として大いに取り扱われているが，その社会・経済的影響の面に関しては研究は絶無に近い状態であった。

さて，上記論文の中で，先生は，十字軍の社会・経済的影響を探るために，数度の遠征に必要な莫大な軍事費に着目され，それを調達する機構とその運営に研究の中心をおかれた。そして神殿騎士修道院と国王，諸侯，教会機関のからみ合い，さらに貨幣の諸問題の解明に努められた。これらの問題を取り扱う際の方法的特徴は，機能的考察に重点を置き，制度史的考察に偏しないよう心がけられている点である。これは，先生の研究に一貫して見られる態度である。この研究によって得られた成果の総括を，「貨幣経済発達のプロセス」として近く発表されるやに承っている。

中世において広範に影響を与えた戦争は，十字軍と百年戦争であろう。十字軍の例にならって，百年戦争の社会・経済的影響を取扱ったお仕事は，先生の第2の著書「百年戦争」（教育社，昭56年）となって結実する。ここで先生は，百年戦争という歴史現象に対し，政治，社会，経済，軍事，心性の5面から多角的なアプローチを試みていられるが，特に中心課題となっているのは，一方では，誕生期の近世国家が伝来的な封建財政では現実の財政需要を充たし得ず，新しい財政システムを求めて暗中模索する姿をとらえることであり，他方では戦争における兵器の発達に伴う戦術変化を明らかにすることであった。この視

点は，経済社会では，「技術と企業活動」に読み替えることのできるものであろう。

さて，以上のような先生御自身の研究活動の新展開と平行して，この第3期の中頃から，先生は，学会活動のオーガナイザーとして二つの大きな仕事を果され，しかもそれらは，先生の研究活動第4期への橋渡しともなっている。この学会活動については，後節で改めてとり上げることにする。

VI

昭和54年頃を境に，先生のお仕事に新しい展開が見られ，研究活動の第4期を迎える。この期における先生の≪生活史≫の構想は，先生にとって，永年の研究を経て，すべての人間にかかわる学問の基本として位置づけられているものである。このような構想がどのようにして先生に芽生え，現在どのように発達しているかをたどることにしよう。

≪生活史≫への方向づけが明確にされていく素地には，元来先生ご自身が日常生活や日常的な事物に強い関心をもっておられること，換言すれば先生の生活姿勢が強く働いていることをまず第一に述べなければならない。その関心は学問的にはどのように扱いうるのか，ということは先生の研究生活開始以来常に持続されている基本的思索といえる。そしてこのことは学問に対する先生の姿勢，すなわち，およそ生活に間接的にさえ役立たないものは学問としては認めないとされる姿勢にも通じているのである。さらに，先生も述べておられるように，これには恩師宮下孝吉先生の事物――とりわけ日常生活にかかわる事柄――の具体的把握への徹底したザッハリッヒな学問態度が強く反映している。(「宮下孝吉先生の学問」,「国民経済雑誌」,110の3，昭和39年9月，107ページ；「回想」，11ページ)　そしてこの態度は先生が私たちに対しても厳しく要求されてこられたところである。≪現実の中にこそ真理はある≫とされる先生の学問姿勢もまた，この事実の追求・熟視の中から培われてくるのである。(「回想」，9-10ページ)　こうした土壌と経過の上に，先生固有の研究志向，すなわち現実の日常生活の

具体的な局面で生きて活動している人間をそのものとして歴史的にとらえようとする志向が育まれ，今日の≪生活史≫に至る問題関心も深められてきたのである。さらに，この≪生活史≫の体系化の過程において，フランスの＜アナール＞学派での，生きた人間を追求する≪新しい歴史≫・≪深層の歴史≫の展開は，先生が懐いてこられたことに一層の確信を与えたようである。したがってこのような先生の学問態度にとっては，今までの社会科学・歴史学における人間不在が意識されることになった。

こうして≪生活史≫の背後には，従来の，人間にかかわる学問に対する批判として，人間不在の克服を強く意識されてこられたということがある。このような考え方から，先生は，歴史においても人間の復権とそれを射程においた≪生活史≫を構想されるに至ったのである。これまでも人間不在の歴史学，さらに人間不在の社会科学・人文科学といった認識や警告がなされてはいるが，たとえそれが自省の思いを込めて語られる極めて良心的な場合でさえも，実はその人間というのが実体をもたないで語られていることが多いのではないだろうか。しかし先生がいわれている人間は，極めて具体的な，「生活を営む主体としての人間」であり，「それぞれの時代にそれぞれの生活パターンを描き出して来た人間であって，しかも過去の経験を踏まえて，将来に向って理性と自由意志をもって，新しい生活パターンを描き出せるような人間まさしく生きた人間」なのである。（「≪生活史≫の提言――人間不在の経済史学からの脱却のために――」，「経済学研究年報」，31号，昭和60年3月，1－7，20ページ。以下，「提言」と略記。）そしてこの人間観の基底には，「倫理的要素と身体的要素を含んだ人間性的なもの」はそれとして不変に保持しなければならないが，そのためには「その場所と時代の文化に適応して行かなければならず」，したがって「生きた人間は絶えず変化している」ということがある。（「提言」，8－9，20-21ページ）こうした適応のあり方が実は≪生活≫なのであり，それゆえに≪生活≫は生きた人間の営みそのものである。ここにおいて生きた人間を科学に導入するためには，≪生活≫という形態をとって導入することを先生は意図されるのである。以下

では，先生の≪生活史≫の構想を諸著作に依拠しながらたどってみたい。

先生は≪生活史≫を次のようにとらえられる。まず≪生活≫そのものの基本的性格として二側面，「生物としての生存に関する側面」と「その生存をできる限り有意義に享楽せんとする側面」の二側面を重ね，この両側面にかかわる諸現象を≪生活現象≫としてとらえ，これを≪生活史≫の対象とされる。(「生活史の成果と課題——西欧」，社会経済史学会編「社会経済史学の課題と展望：社会経済史学会創立50周年記念」，有斐閣，昭和59年9月，335-363ページ；「提言」23ページ)これを前提として，≪生活史≫として扱うべき具体的な諸要素については，第一に，日常生活全般を支えている精神的基礎としての≪心性≫の問題が挙げられる。これは日々の≪生活≫において人々の思考と行動に常に作用する常識・生活意識，すなわち，時間・空間に規定された範囲内で一般に是認された心的態度として示されている。(「社会経済史の構成方法を求めて——具体的事例に即して——：問題提起」，「社会経済史学」，44の4，昭和54年1月，4-5ページ) 第二に，この≪心性≫と深く相関しつつ，具体的な≪生活現象≫として現実の≪生活≫の営みの問題が提示される。ここでの≪生活≫の営みはまさに人間の誕生から死に至るまでを包括し，その場合，≪生活≫の本拠となる家族の形成・存立が出発点として示される。具体的には次の諸項目が現象形態として挙げられている。(「提言」，23ページ)

1) 生活の本拠　a) 家族　b) 家政管理
2) 生命の生誕　結婚・セックス・育児
3) 生活の維持　a) 食・衣・住　b) 労働と余暇
4) 生命への障害　病気・治療・衛生
5) 生命の消滅　死

これらの各項目についての詳細は紙幅の都合上省くが，それぞれの項目はいずれも人間として生きていく上でだれもが共有する局面である。それらは相互に密接な関連をもって連動し，さらにその時々の≪心性≫によって規定される。

≪心性≫あるいは心理的要素を投入して歴史を把握するということに関して

は，先生の場合，≪生活史≫として新たに意識されたのではない。すなわち，現実の「歴史現象は人間の単純な日常行為の積み重ねから成り立って」おり，この行為は「常に同時代を支配する社会的意識」に規定されているというとらえ方から（「回想」，12ページ；「西洋中世後期における≪為替取引≫の経済的機能とその意義」，「国民経済雑誌」，120の5，昭和44年11月，18ページ），先生にあっては，経済史・歴史一般の解釈において，早い時期から論述の中で歴史心理学的解釈が随所になされている。なかでも，「西洋中世後期における≪為替取引≫の経済的機能とその意義」では，この時期における為替取引の一層の普及について，時間意識の変化が作用したことを強調される。すなわち，これまでの，時点の差異としてのみの時間意識（農業と結びついた，神の支配する時間としての意識）から，時間の経過＝期間としての時間意識（大衆品の商工業の発展に伴う人為的・計画的時間の意識）への現実の変化に対応して，キリスト教会主導の徴利禁止という伝統的制度を合法的に回避しつつ，商人が為替取引を積極的に推進して行った，と先生はとらえられる。そしてこうした時間意識のあり方，さらにその変化は，まさに当時の≪生活≫の基本的心性として人々の日常諸行為を規定したであろうことは推察に難くない。この他に，≪心性史≫的な思索を踏まえて，空間・自由・社会の価値基準など最も人間の行動の基本をなしている意識の変遷を導入することによって，斬新な歴史解釈がなされている。（「提言」，27-29ページ）また論文「16世紀のアントヴェルペンの≪市民階層≫と不動産所有——H. SOLY の見解によせて——」（「国民経済雑誌」，137の5，昭和53年5月）でも，市民階層の不動産所有を≪心性≫の一断面としての階層意識の高揚とかかわらせてとらえられている。さらに先生はこうした問題関心と方法的試行を著述に著わされただけでなく，この間に，昭和51年度から数年間にわたって南山大学で≪時代と意識≫という題目で近世初頭の≪心性≫をすでに講義されていた。

いずれの歴史現象も，その時代・社会の中に位置づけて解釈しなければその真の姿に至らないのであり，その時そこに意識的・無意識的に作用している人

間の心の働きが考慮されてはじめてその全一的な理解が得られるということを先生は示されるのである。そして日常生活そのものを対象とする≪生活史≫にとっては，≪心性≫と≪生活現象≫が表裏一体をなすだけに，この≪心性≫の側面は一層の重みをなすのである。先生が≪生活史≫の精神的側面を≪心性史≫とさえいわれるのはこのためである。(「回想」，11ページ)

さて，≪心性≫との関連を十分踏まえながら，具体的な≪生活現象≫を対象とした著述として，論文「ヨーロッパの歴史における生活と塩——生活史としての食事史の一齣——」(「国民経済雑誌」，149の3，昭和59年3月)は，≪生活史≫としての総合的取り扱いを明示するものといえる。ここでは，18世紀までのヨーロッパにおける塩と≪生活≫との関連について，第一に，塩に対してヨーロッパ人が懐いてきた意味あい・感覚，第二に，生命維持上の塩の必要量と過剰摂取の傾向，第三に，この傾向をもたらすに至った食料保存のための塩の役割とその歴史的性格，という観点から≪生活史≫としての食事史の試論がなされる。この諸観点が示すように，生活必需物資としての塩を≪生活≫との多面的なかかわりからヨーロッパの歴史的経過の中で検討されたもので，従来の経済史的・政治史的扱いとも，またこれまでありがちな食事史的扱いとも視点を一新する。またこれより先に物された，「粗食と宴会——食事史からの断章——」(「凌霜」，261号，昭和53年11月，6-8ページ)ならびに「日照と住まい」(「健康」，180号，昭和54年4月，26-27ページ)は，共に小論ながら≪生活史≫としての取り扱いを十分示唆するものである。前者で先生は，中世ヨーロッパにおける庶民の粗食を常とする食事状況としばしばの宴会との関連について，庶民生活における共同体的性格を考慮しつつ述べられ，当時の社会生活の一面を描きだされている。後者では，生活環境・生活様式に大きく影響する住居と日照についての受け止め方，気候的条件と家の構造や衣生活のリズム，さらに戸内外の生活をヨーロッパと日本について言及されている。こうした≪生活史≫を意識した把握こそは今後の比較文明史的考察にとってもより有効な総合的視点を与えるものではないかと思われる。

先生の最近の論文「≪生活史≫の提言——人間不在の経済史学からの脱却のために——」で展開されている構想は歴史の総合的把握への最も基本的な道を求めてのものであり，その意味で先生ご自身の研究生活の中で培われた史的認識，問題関心，方法的試行の一つの結実といえる。このような人間の総合の学としての奥ゆきと広がりをもった≪生活史≫の扱いはこれまで皆無といってよい。生活史を冠した業績がなかったわけではないが，それらは往々にして生活の一領域に焦点を当てたものであった。それゆえに今後この体系をより具体的に敷衍する個別論文の発表を心から期待するとともに，その継承・発展は私たちの今後の課題である。私たちは，先生の≪生活史≫の提言の中から次の一節を引用し，私たち自身の歴史研究の一つの指針として今一度かみしめたい。「生活史を提言するのは，既存の社会・経済史学にとって代るためではない。既存の社会・経済史学は，それ相応の目的を持ったものであり，今後もますます深められて行かなければならないものである。ただ，ここで提言する生活史は，社会・経済史のみならず，いかなる史学であろうと，「生きた人間」にかかわるものであるからには，常に考慮しなければならない分野であるに拘らず，これまで余りにも等閑視されて来たと考えられるからである。従って，既存の社会・経済史学を補充するものと言えるが，言葉の本来の意味での補完だけでは十分ではなく，むしろ生活史を基礎にして社会・経済史学，さらに史学が打ち立てられなければならないと考える。」(「提言」，42ページ)

VII

以上，38年に及ぶ山瀬先生の研究活動を，主に先生の発表業績を中心に，いくつかの時期的な節目を設け，いわば発展の相の下に跡づけてきた。これらは純粋に先生個人に帰せられるべき仕事の系列である。しかし，研究者としての先生の活動分野はこれに尽きるものではない。私たちの設定した時期区分でいえば，第3期の中頃，昭和46／47年を境に，先生は，グループ研究のオーガナイザーならびにリーダーとして，二つの重要な仕事を果されている。本節では，

その活動分野に触れて，先生の多面的な活動の一端を紹介したい。

〔1〕 その一つは学会活動である。先生の所属する社会経済史学会は，年1度の全国大会で，学会日程の後半の一日を共通論題によるグループ研究報告に当てている。昭和42年1月以来本学会の理事に就任し，学会の中核として活動されてきた先生は，学会本部の要請を受けて，昭和49年度大会で「工業化と教育」さらに昭和53年度大会では「社会経済史の構成方法を求めて」という共通論題報告のオーガーナイザーならびに問題提起者として卓越したリーダーシップを発揮されている。

前者，「工業化と教育」は，19世紀の産業革命期に焦点を合わせて，各国における工業化の歩みと近代的技術教育の導入・開発状況との歴史的関連を，国際比較的（英，独，日）に分析しようとしたものである。この分析を通じて，経済発展において教育の果す重要な役割の少なくとも一つの側面を浮彫りにしたい，というのがこの研究グループの共通の狙いであった。このテーマは，その重要性にもかかわらず，これまで内外で本格的に取り上げられたことがなかっただけに，参会者に多大の感銘を与えた。

後者の「社会経済史の構成方法を求めて」は，制度的・機構的側面に重点がおかれがちな従来の社会・経済史研究に対する一つの見直しとして提示された試論群である。そこでは，歴史における主体，すなわち≪行為する人間≫の意義が強調され，この主体を適確に把握する方法が模索される。その場合，報告者共通の想源として，フランス・アナール学派の志向する「新しい歴史」・「深層への歴史」の方法とその方法による具体的成果があった。この報告などが一つのきっかけとなってアナール学派の歴史認識・方法としての「構造」，「持続期間」といった固有の概念，同じくアナール学派の特徴的な方法としての時系列史，心性の歴史，物質生活史の構想が，以後わが国の史学界の流れに少なからぬ刺激を与えることになった。

以上2回の共通論題に共通に見られるものは，人間的要素の重視であり，前者では教育による人間形成の側面に，後者では≪生きた人間≫の営みである生

活態様の理解に直接照準があてられている。

〔2〕 グループ研究のオーガナイザーとしてのもう一つの活動分野は，西洋経済史文献飜訳シリーズ監訳者としてのお仕事である。本誌巻末に掲載されている先生の著作目録には，共訳書の項に6つの訳書が挙げられている。これらは，昭和47年から57年までの10年間に，先生のリーダシップのもと，神戸大学西洋経済史研究室の手によって訳出されたシリーズものであり，いずれも「一般的なもので最近の学界状況を示すもの」という選定基準によって選ばれた著作の飜訳である。原書の言語は英，独，仏の3か国にわたり，そのテーマを見れば，方法論に関するものが3冊あり，他は封建制・領主制，重商主義，産業革命といった経済史学上最も基本的なカテゴリーに関する最新の研究書である。

神大西洋経済史研究室とは，山瀬先生の指導のもと，大学院で西洋経済史を専攻した若手研究者を主たる構成メンバーとする研究グループの名称である。さて，飜訳すべき原書が定まると，先生はこのグループの中から複数の訳者を選び，まずは第1次の粗訳を行なわせる。粗訳が完了すると，先生を中心とする検討会が長期間にわたって定期的に開かれ，そこでこの粗訳が一語一句まで徹底的に吟味され，改善に向けて無数の修正が施される。この際，ヨーロッパ数か国ならびに古典語に精通されている先生の語学力は，若い飜訳者たちの手に負えない難文を解読し，さまざまな誤訳や拙訳を未然に防ぐ上で，大いなる威力を発揮した。彼らは，いわば先生の肩車に乗って訳業を果したのであるが，それにもかかわらず，先生は監訳者としてすらお名前を出されず，終始一貫神戸大学・西洋経済史研究室訳で押し通され，この訳業がグループメンバーの対等の共同作業であることを強調された。リーダーが自ら示されたこの無私の精神とデモクラティックな態度は，当研究室の基本的なモラルとして今後継承して行く必要がある。

さて，こうして誕生した6冊の訳書は，幸いにも，現代ヨーロッパ史学の新しい息吹きを伝えるものとして好評を得ている。このシリーズは6冊を以て第1期を完了する。第2期シリーズは，まだ具体化されていないが，第1期刊行

の基本的文献から派生した特色のある方法論ならびに問題意識に基づくものに範囲を拡大する予定である。

VIII

以上，私たちは，先生の多面的な研究活動の跡を，若干の主要局面にしぼって大づかみにフォロウしてきた。ところで，これまでほとんど触れる機会がなかった先生のもう一つの基本的な活動分野として教育活動がある。先生の学問を構成する2本目の主柱であるが，いうまでもなく上述の先生の研究活動と密接な補完関係にある。

教授に昇任される以前の先生の教育活動は，学部での外国書講読，西洋経済史特殊講義の担当，さらに宮下ゼミナールにおける学生指導の補助を主な内容とする。筆者（高橋）は，たまたま昭和32年に先生の「南欧経済史講義」を学部学生として受講する機会を得た。現今のカリキュラム編成ではとても想像できない，まさに特殊講義であった。幸いその時の講義ノートが私の手もとに残っている。これを見ると，驚くべきことにその講義内容は，現在の私の目から見ても相当に高度なものである。たとえば，中世南フランス都市におけるconsulat の成立，フィレンツェ毛織物工業とチオンピの叛乱，フランドル毛織物工業史などそのままで学術論文となりうる高水準の講義内容であり，先生はその当時執筆中の論文を学生向けに噛み砕いて語られたのである。当時，先生の研究室を訪れると，先生は最近入手された英，仏，独などの文献の中からめぼしいものを数冊選ばれて私たちの目の前に並べ，一冊一冊についてその著者と内容を解説された。こうして私たちは，欧米歴史学界の最新情報について耳学問させて頂くとともに，文献的世界の奥深さに驚嘆させられたのである。

留学から帰られて以後，宮下先生御退官の後を承けて，先生は西洋経済史の正講座を担当されるとともに，学部のゼミナールと大学院において西洋経済史専攻の学生ならびに院生を指導されることになった。爾後退官までの21年間，先生のゼミナールを卒業した学部学生は，第2課程も含めて，250余名に達し，

大学院西洋経済史専攻者は13名を数え，その全員が現在自立した研究者として学界で活躍している。特筆すべきは，この研究者のうち女性が3人を占めることである。国立大学の経済学部で，自立した女性研究者を3人も育成した例は希有ではないかと思われる。

学部ゼミナリステンの募集に際して，学生への要望事項の第一には，「既成の枠にとらわれない自由な発想の出来る方」が挙げられていた。このことは，先生の学部・大学院指導方針がおのずから自由闊達であり，学生の自主的意欲をできるだけ尊重することと相通じるものであった。

先生は，折に触れて学生や院生に次のように忠告された。生活や研究の上で行き詰まった時，その解決策を安易に本の中に求めてはいけない。街に出でよ，この生きた現実を素直に直視せよ。そうすればおのずから解答はあらわれてくる。まさに書を捨てて街に出でよ，の教えである。こうして先生は，若い学徒が現実から逃避して頭でっかちのひからびた知識屋にならないように警告されたのである。

先生はまた，学問のための学問，象牙の塔の学問を峻拒される。学問は何のために役立つのかという問に対して，先生は躊躇なく，学問は自分のためにするものであり，自己形成に役立つべきものであると答えられる。およそ自分の役に立たないものをどうして人に教えることができようか，学問の成果と研究者の行為は一致しなければならない。一見現実離れのした迂遠な学問研究者のように思われがちな西洋経済史家の発言だけに意外に感ずる人もあるかもしれない。しかし，先生は西洋経済史を学ばんとする学生に，常々現実逃避的な過去の好事家にならないよういましめられたのである。

こういうわけで，先生は若い学生を特定の枠の中に閉じこめて，予め定められたスケジュールを強制するというやり方を好まれなかった。先生のゼミナリステンは，テーマの選択やアプローチの仕方において，自主的に判断し決定したのである。ただし，ひとたび学生が自らのテーマを確定するや，そこから先の先生の研究指導は徹底的に懇切丁寧であり，また事と次第によっては学生が

蒼ざめるほど峻厳であった。先生の大学院生で一度も涙を流さないですむものはいなかった。また学問以外の学生の公的・私的問題についても，時間の許す限り，というよりは御自分の時間を犠牲にされても，学生の良き相談相手となられた。先生が学生指導の面で，手を抜いたり，なおざりな態度を示したことは，私たちの知る限り一度もない。いかなる場合にも，先生は，学生一人一人に対してその学生の個性に即して全力投球の姿勢を崩されなかった。その場合，学生に対する先生の態度は，決して教授の権威をかさに着た抑圧的なものではなかった。私たちの見るところ，先生には元来 Herrschaft 志向は極めて乏しく，逆に Genossenschaft 志向は強烈であり，先生の体質と化している。先生は，本質的にデモクラットであり，今後もそれ以外ではあり得ないであろう。

IX

先生の第3の活動分野は，大学，学部，教授会等の教育・研究組織を運営するための行政活動である。

先生は，終戦後神戸経済大学に残られた最初の助手であった。戦後まだ研究体制の整わない昭和24年に，同志とともに助手の研究会を組織し，その最初の責任者として，若手研究者の研究意欲を高めるのに大いに貢献された。

戦争のため，先生とすぐ上の先任の方との間には7年の空白があった。このため，先生には若年にして学部運営上の諸役職，すなわち機関誌，年報の編集委員，補導委員，教務委員などの諸委員が次から次へと押し寄せ，先生の研究にかなりの妨げとなったようである。このような次第で，先生は45才の若さで，昭和42年6月から44年4月まで経済学部を代表する神戸大学評議員をつとめられ，折柄全国的に燃え上った大学紛争の中でしばしば徹夜の「大衆団交」に臨み，最年少の評議員としてその解決に努力された。

つづいて昭和47年11月から49年11月までの2年間，先生は経済学部長に就任された。大学紛争の余燼がなおまだくすぶっている時期であり，先生は学部長としていくたびか深刻な問題に直面された。「大衆団交」その他の席で，怒号

の飛び交う中，学部長としての全責任を背負って，徹夜で学生との交渉にあたられることもあった。この時の過労で一時入院を余儀なくされたが，持前の強い責任感によって最後まで職務を放棄されなかった。「大衆団交」を迫られた場合，先生は，交渉相手の態度をアプリオリに推断し，この予断に基づいて会うか会わないかを決めるというやり方をとられなかった。先生は，とにかくまず会って話し合える相手か否かを見定められ，話し合える相手でないと判断された時には，その交渉相手とは再度会うことを断固として拒否された。人間と物の世界に対する囚われない眼——先生の生活信条の一端がここにも窺われる。

先生はまた，大学紛争の渦中にあったものとして，この紛争の主因を，固定形骸化した制度と刻々と変化して止まない現実との間の甚しい乖離と齟齬にあると認識された。この認識に触発されて，先生のユニークな論文「西洋中世後期における≪為替取引≫の経済的機能とその意義」(「国民経済雑誌」，120の5，昭和44年) が誕生する。このことは，先生の学問が現実と常に結ばれており，日常の行動が学問への刺激となっていたことを物語っている。

学部長を任期満了されて2か月後，先生は，日本学術会議第10期会員（第3部）に全国区から選出され，53年1月までの3年間，この要職にあった。この間，学術体制委員会と人間と科学特別委員会に所属し，日本における学術研究の発展のために尽力された。その後，昭和58年4月から2年間，財団法人大学基準協会の大学基準委員として，日本における学術体制の改善のために努力された。

X

私たちは，以上9節にわたって，山瀬先生の学問をできるだけトータルな姿で画き出そうと努めてきたが，私たちの非力さの故に，広大なスケールをもつ先生の学問体系について不完全な画像しか提供しえなかったのではないかとおそれる。与えられた紙幅も尽きようとするこの最終節で，私たちは，これまでの記述を踏まえて，私たちの理解する限りでの山瀬史学の基本的性格を要約し，

むすびに代えたい。

山瀬史学の最新の到達点と現在の新境地については，第6節で比較的くわしく説明した。すなわち，≪生活史≫の提言にあらわれた新しい問題領域の発見と，その問題領域を切り拓いて行くための新しい方法の開発である。しかし，山瀬史学のこの新境地は，ある日突然の天啓のごとく先生の頭に閃いたものではなく，40年にならんとする先生の経済史研究がその時間の厚みの中で十二分に熟成させた果実である。山瀬史学を常に膨張しつつある一つの球体にたとえるならば，いま球表面で輝きを放ちつつ躍動している部分がこの果実に当たる。この下方，球体の中層に，≪生活史≫の構想を支えている方法的基盤があり，さらにこの方法的基盤を中核部で支えている人間的基層がある。私たちは，山瀬史学をこの三層構造において捉えたい。

方法論の観点から見た山瀬史学は，基本的には19世紀に確立したヨーロッパ実証史学の伝統を継承する。したがって，史料に基づく批判的・実証的方法によって歴史現象を発生史的に捉えるという基本的態度はこれを堅持しつつ，史料の範囲については，19世紀実証史学よりもはるかに広く解釈し，他方史料によって歴史像を再構成するプロセスにおいて社会理論，経済理論を導入する必要性を強調する。報告史料をクロノロジカルに配列して行けば，自ら歴史が顕現するという理論なき素朴実証主義は山瀬史学のとるところではない。

このように山瀬史学は，19世紀ヨーロッパ史学の良質の伝統を継承しつつも，他方では，19世紀社会科学を特徴づける「進化論的発展思考」と「一般的に妥当する法則の定立」を否定し，これに代えるに，歴史現象の機能的把握を重視する「中範囲の理論」「中範囲の一般化」を主張する。したがって，山瀬史学は，概念が先行しカテゴリーが乱舞する空虚な概念史学を峻拒し，進化論的発展思考を根底にすえたさまざまな「歴史法則主義」的発展段階論を克服さるべき虚妄と断ずる。

山瀬史学は，史的認識と理論的認識の適正な結合方式として「中範囲の理論」を推奨する。それは，複数の社会体制を貫く壮大な「歴史法則」や自然科

学の法則に類比さるべき普遍妥当的な「社会法則」の定立に代えて，現実に把捉可能な限られた範囲 (middle range) で，観察データーに密着した抽象化を行ない，検証可能な命題の有意味な集合としての一般化を試みるものである。

このような方法的特質をもつ山瀬史学において，それでは近年の学界にあらわれているさまざまな潮流はどのように評価され，位置づけられているのだろうか。ここでは，経済史の数量化傾向と経営史的研究という代表的な二潮流をとりあげ，これに対する先生のお考えを簡単に紹介しておきたい。先生は，価値意識としての質と量の観点から，文明を質的文明と量的文明とに区別し，量的文明はルネサンスによって徐々に質的文明に交替し，19世紀になって初めて量的文明が優越し，つづいて過渡に重んぜられ，次第に弊害を生みつつあるのが現在であると考えており，両文明が調和することこそ将来の文明の望むべき目標でなければならないとされる。研究方法は研究対象のの性格によって規定されなければならず，したがって経済史の数量化の傾向は，19世紀以後においてはより多く是認されうるが，その場合でも質への考慮が無視されるならば，歴史的研究たる資格をもち得ないと考えておられる。数量的研究の利点を認めるが，歴史的研究におけるその限界をも十分に意識し，一つの手段としてのみ是認する，という立場である。経営史学については，先生にはいくつかの業績があるが，これらはすべて人的，社会・経済・政治的，文化的などの関連の中で考察されており，これらの関連から経営体を孤立化して取り扱うことには否定的である。

以上のような山瀬史学の方法的基盤をさらに下支えしているものが，山瀬先生その人のパーソナリティの全体である。私たちが人間的基層と呼んでいるものである。もちろん私たちは，ここで，山瀬先生の人物論を展開する意図はなく，またその力もない。ここではただ，先生の知的形成過程において一定の影響力を与え続けた主要因を検出するのみである。

知的パーソナリティの形成過程において，先生の精神に最も強い響影力を与えたものは近代ヨーロッパの知性であり，ヨーロッパ市民社会の精神であった，

と私たちは想定する。そのことをやや分析的にいうと，先生の知性を特徴づける主要因は，価値における相対主義，方法における近代合理主義，生き方における個人主義ということになろうか。もっとも一口にヨーロッパといっても，その世界は多彩である。もちろん先生の知的関心は，濃淡の差はあれ，ラテン系世界，ゲルマン系世界，スラブ系世界に及び，ヨーロッパ全域を包括するが，先生の心を惹きつけて止まないヨーロッパ，先生の気質に最も適合するヨーロッパを敢えて選ぶとすれば，それはラテン風地中海的世界ではないかと推測される。このラテン風地中海世界の文化は，秩序と体系を志向しつつ無限に自らの内に沈潜していくゲルマン的文化と異って，多様な沿岸文化を吸収し，異質の文化を交錯させ，集団への熱狂と帰依よりは個々人の完成と円熟を主体的に追求する。さまざまな要素が一見無秩序に混在し，パレット皿をひっくりがえしたように見えるが，決してアナキーに向うことはない。文化を支えているのはしたたかな人文主義的個人である。先生が常日頃好まれて使われる「無秩序の中の秩序」という言葉が最も抵抗感なく適用できる文化空間である。

このように，山瀬史学を三層の球体として観察した場合，中核のラテン風地中海的文化志向と表層の≪生活史の構想≫とは，中間の機能的把握を目指す中範囲の理論に媒介されて，無理なくごく自然に結合する。少なくとも私たちはそのように理解しているのであるが，やや比喩に頼って印象批評に走ったかもしれない。元来一個人の知的プロフィールを完全に描出することは並大抵の仕事ではない。ましてや対象が山瀬先生のような老練者ともなれば，なおさらのことである。以上の私たちの記述の中には，私たちの気づかない不十分な理解やあるいはひとりよがりの誤解がいくつか忍びこんでいるかもしれない。もしそうであれば，それはひとえに私たちの未熟さと非力によるものであり，先生には深くお詫びを申し上げなければならない。大方の御批評を頂きつつ，次の機会にヨリ正確な「山瀬像」を提示するよう努めたい。

末筆になりましたが，山瀬先生の御健康を心からお祈りするとともに，これ

からの先生のお仕事に向けて，大変僭越ではありますが，以下二つのお願いを申し述べさせて頂きます。

㈠先生の大量の研究蓄積のうち，単行本の形で公刊されているのはごく一部であり，他の多数の貴重なモノグラフィーは今日次第に入手困難になりつつあります。これらの珠玉の業績のせめて一部なりとも近い将来に単行本の形で公刊して頂ければ，私たち後進にとってのみならず，学界全体にとっても裨益するところ大であります。たとえば，「中世ヨーロッパ財政・金融史研究」，「中世ネーデルランド社会・経済史」の個別研究，さらに山瀬史学に支えられた全体史としての「ヨーロッパ経済史」などであります。

㈡≪生活史≫を提唱されて以後，先生はすでにその具体化作業に着手されていますが，このお仕事を今後一層押し進められて，この新史学のパイオニアとして私たち後進に絶えざる研究刺激とすぐれた研究模範を与えて頂きたいと願います。

（本稿作成に当たり，第6節は中村が，他は高橋が担当執筆した。）